

〈 野 菜 〉

○アスパラガス（露地長期どり）

- ・長期どりアスパラガスは、降霜に1～2回遭遇して十分に黄化してから、茎葉の刈り取りを行います。刈り取り時期が早すぎると貯蔵根への養分転流が十分に進まず、翌年の春どり収量が低下します。刈り取りはブッシュカッター等で、なるべく地際から刈り取ります。
- ・刈り取った茎葉は茎枯病、斑点病の伝染源となるので、ほ場外へ持ち出します。
- ・ほ場内の病原菌の除去や越冬害虫対策は、火炎バーナーで株元や畝面を焼却する方法が効果的です。

○アスパラガス（促成栽培）

- ・促成アスパラガスの伏せ込み床の必要面積は、根株養成ほ場10a当たり伏せ込み床面積で10坪程度が目安となります。温湯ボイラー等の加温設備の準備・点検をしておきます。
- ・12月下旬の需要期に最初の出荷ピークを合わせるには、早掘栽培が効果的です。今月上旬に茎葉を刈り取らずに株を掘上げ、1～2週間程度ほ場に放置した後茎葉を刈り取り、従来どおり伏せ込み、加温を開始します。
- ・従来の伏せ込み栽培の場合は、茎葉が黄変し、貯蔵根の糖度（Brix示度）が20度以上に上昇したのを確認してから掘り取ります。
- ・貯蔵根の糖度は、測定する部位によって異なります。やや深い位置にある長い貯蔵根を抜き取り、株から5～15cm部位の搾汁^{さくじゅう}を用いて測定します。
- ・掘り取り後は、乾燥や凍結を避けるため、できるだけ早く伏せ込みます。掘り取り後の置き場所は、温度が高く、乾燥しやすい場所では蓄積した養分の消耗が早まるので注意します。
- ・伏せ込みは、根株の鱗芽^{りんが}が温床の上端から5～6cm下の位置になるように揃えます。床内の温度を均一にするため、根株に隙間ができないように1列伏せ込むごとに合い土を入れます。最後に株の上に芽土を5cmくらい入れ、土が根株の間に入るよう十分にかん水します。

○ハウレンソウ（寒締め栽培）

- ・ハウレンソウは品種により低温伸長性、べと病抵抗性が違います。寒締め栽培の品種を選択する場合は低温伸長性、べと病抵抗性を考慮して品種選択を行います。
- ・ハウレンソウは15～20℃が生育適温で、5℃以下では生育が停滞します。生育が停滞する前の生育コントロールが重要です。
- ・生育の目安は、11月中旬に15cm程度、12月上旬までに20cm程度の草丈を確保することを目標とします。目標より生育が進んでいる場合はハウスサイドや入り口を開けて換気を行い、遅れている場合は不織布等のトンネルかべたがけを行い保温します。なお、べと病が出やすい時期であることから、保温の場合でも常時密閉は避け、ハウス内の湿度を高めないように換気を行います。

○加温施設の省エネルギー対策

- ・冬期を迎える前に、加温を行う施設では省エネルギー対策の点検を行います。省エネルギー対策

は、ハウスからの放熱の抑制と採光性を高め土壌への蓄熱量を増やすことがポイントです。

- ・多層カーテンや防風ネットを設置し放熱を抑えるとともに、外張り資材の損傷部分、開閉部の隙間をふさぎ、カーテンの合わせ目や裾部分も隙間がないようチェックし、ハウスの機密性を高めます。
- ・ハウス内に温度ムラがあると暖房効率が悪いため、温風ダクトの適正な配置や循環扇を設置し、温度を均一に保つようにします。暖房機は完全燃焼できるよう、ノズルや熱交換面の清掃、空気量の調整を適切に行います。

〈 果 樹 〉

○りんご

- ・「ふじ」の果実肥大は平年並に推移しています。収穫については次の事項に注意して行います。
 - ① 収穫期が早いと未熟で食味が悪く、遅くなると寒波や凍害に遭遇する可能性が高まるので、適期に収穫します。
 - ② 収穫期の判断は、外観だけでなく、食味やミツ入りなども確認して決定します。
- ・りんごの疫病（果実発病）は、土壌中の菌が果実に付着することで、収穫後の果実が腐敗する病気です。疫病対策として、次の点に注意します。
 - ① 降雨時の収穫はできるだけ避け、やむを得ず行う場合は、果実に泥水が付着しないように、収穫かごやコンテナの底にビニールを敷くなどの対策を実施します。
 - ② 収穫作業中、脚立についた泥には触れないなど、手を汚さないようにします。
 - ③ コンテナは、野積みにはしておかないようにします。
- ・収穫期は、低温遭遇や降雪の可能性があるので、常に天気予報に注意します。
- ・果実が凍結した状態で収穫すると押し傷がつき、貯蔵中の腐敗の原因になります。収穫は解凍したことを確認した上で行います。また、凍結した果実はみつ入りが多くなり、貯蔵性が低下するので早めに販売します。
- ・収穫前の降雪は、大きな枝の欠損被害につながるので、新しく軽いうちに落とします。

○ぶどう

- ・県南部等の多雪地帯では、雪害に備え、速やかに粗せん定を実施します。
- ・個々の樹のせん定に入る前に、状況に応じて間伐、縮伐、不良樹の伐採などを行います。

○収穫後の園地整理

- ・収穫を終えた園地では、支柱等の園地整理を行います。
- ・落果や落葉は病害の発生源になりますので、土中に埋没するなどの処分を実施します。
- ・土壌調査等による土壌診断を行い、酸性化が進んでいる場合などは、苦土石灰や溶りん等の土壌改良剤や堆肥を施用するなどの土壌改良をします。

○越冬対策

- ・幼木は、しっかりした支柱を立てて主幹部を結束します。また、側枝の折損を防ぐためにヒモなどで側枝を束ねます。

- ・若木は、積雪前に雪の乗りやすい徒長枝などの粗せん定を行います。
- ・野ねずみ対策として、殺そ剤を利用して園内の密度を減らします。薬剤を投入する日の前日にそ穴を踏み固め、翌日開いた穴に投入すると効果的です。
- ・食害対策として、主幹を保護するために、根雪前に金網、ビニール(厚さ0.1mm以上)、杉葉、合成樹脂のプロテクターなどで、地際部から地上約1mまで被覆します。

〈花き〉

本格的に寒くなってきました。暖房機を用いる品目や作型では、すきま風を防ぎ、内カーテンの利用でハウスの密閉度を高め、保温力の向上を図ります。一方、低温性の品目などは十分に換気を行います。気象の変化や品目に応じて適切な管理を行い、品質向上に努めます。

○トルコギキョウ

- ・今の時期は温度確保が重要なポイントになります。低温が続くと開花が揃わず、開花数等が出荷基準に満たなくなりますので、施設内を15℃以上に維持し、保温に努めます。
- ・保温のためにハウスを閉め湿度が高まると、灰色かび病により花卉にシミが発生しやすくなりますので、ハウスの開閉をこまめに行いハウス内の湿度を下げます。暖房機の送風や小型扇風機等の利用も有効です。

○ストック

- ・間伸びがなく、茎葉と花穂がしっかり詰まったものに仕上げるため、最低温度が8℃以下になるまでは夜間でもハウスサイドを開放し、換気に努めます。
- ・晩生種など、この時期に未収穫で残っているものは、灰色かび病による花シミの発生にも注意します。換気はもちろんのこと、発生しやすい品種はあらかじめ予防防除を行います。

○キクの親株

- ・ハウスに伏込んだ親株は、土壌の乾燥やハウス内の低温で活着不良になると、生育が停滞します。
- ・土壌表面が白く乾いているときはかん水します。できるだけ葉にかけないようにホースの先に直管等を取り付け株元に丁寧にかん水します。また、根の発達を促すためハウス内を15℃に保ちますが、活着を確認したら11月いっぱいには十分低温に当てます。
- ・白さび病の発生に注意し、天気の良い日を見計らって予防のために薬剤散布を行います。

○ダリアの掘り上げ

- ・球根は凍結や過湿によって腐敗するため、露地では11月20日頃までに掘り上げます。
- ・方法は、スコップを株の周囲に円形に差し込んだあと、茎に手を添えて、スコップを斜めから深く差し込みながら少しずつ持ち上げ、丁寧にいきます。
- ・茎から球根の付け根の部分に発芽点があるため、首が折れないように注意します。
- ・掘り上げた球根は軽く水をかけて土を洗い流し、茎をできるだけつけないように切り落としておきます。
- ・切り口の空洞部分のシャーベット状の組織は除去し、天日で2日位乾かした後、分球作業に入ります。すぐに分球できない場合は、土が付いたまま保存しておき、分球作業の前に水洗いします。

〈 畜 産 〉

○畜舎の管理

- ・冬に備え畜舎周りを点検して破損箇所を修理するなど、すきま風が入らないようにするとともに、冬期でも十分な換気ができるように開閉箇所を確保します。
また、給水設備など凍結が心配される箇所には電熱線や保温資材で被覆するなどあらかじめ対策しておきます。
- ・冬期間の堆肥舎スペースの確保や来春の作業軽減のため、飼料畑や牧草地への堆肥散布をできるだけ秋のうちに行います。なお、散布にあたっては周辺環境に十分配慮します。

○飼料の切り替え

- ・牛への稲WCS給与を開始する場合は、2週間程度かけて徐々に慣らしていきます。
また、給与粗飼料は稲WCSだけの給与ではタンパク質が不足しますので、良質乾草やヘイキューブなどを併用します。
- ・放牧から下りてきた牛には、濃厚飼料を急に与えると下痢の原因になりますので、2週間程度は粗飼料主体の給与として、徐々に濃厚飼料に慣らします。

○牛の削蹄の励行

- ・牛の削蹄は、蹄病の発生を抑えるとともに、安定した立ち方と歩き方を維持することにより、生産性の向上や耐用年数の延長につなげるための大切な管理です。
- ・牛の蹄は1か月に5mm程度伸びますが、特に舎飼いでは減耗が少ないことから伸びすぎになりがちですので、年2回以上行うようにします。
子牛においても蹄の管理は成長過程の体型や発育に影響するとともに、子牛市場での評価にも影響しますので、計画的な削蹄管理を励行します。

(お問い合わせ先)

秋田県農林水産部園芸振興課

TEL : 018-860-1801 FAX : 018-860-3822

E-mail : engei@pref.akita.lg.jp